

ばんけい

教育ほつとにゅーす
かわら版こみち
教育の小径

5月号

2012
MAY
No.43

今月のこぼ

精神一到何事か成らざらん
 どのような困難なことでも、精神（心）を集中して物事に取り組むことによって、必ず成し遂げることができるという意味です。「為せば成る」とよく似ています。

今月の記念日

小学校開校の日(5月21日)
 1869年(明治2年)のこの日に、日本で初めての小学校が開校しました。京都市の「上京第二十七番組小学校」です。「番組」とは当時の行政区画のことです。住民がお金を調達してつくりました。



国士舘大学教授
北 俊夫先生

今月の
テーマ

なぜ「教師間の協力的な指導」なのか

- 複数の教師が協力して授業を展開することによって、個に応じた指導が充実し、子どもたちの学力を向上させることができます。
- 教師は協力的な指導によって、同僚意識を培うことができます。地域の人たちとのチームティーチングは、地域に開かれた学校づくりに貢献するものです。

個に応じた指導を充実させる

学習指導要領総則では、各教科等の指導において「教師間の協力的な指導」を充実させることを求めています。協力的な指導とは、一般にチームティーチングと言われています。なぜ「教師間の協力的な指導」が求められているのでしょうか。

まずは授業における意味です。学習は、それぞれの子どもにおいて個別に成立しています。子どもたちの学習は多様に展開され、そこには学習の差と違いがみられます。差とは、理解度や習熟の程度(レベル)のことです。違いとは、問題意識や調べ方など学び方の違い(広がり)のことです。教科には、学習の差がみえやすく、差に対処しやすい教科と、違いが重視される教科があります。すべての教科で協力的な指導を展開することが大切です。

複数の教師が協力して指導することにより、一人の教師が指導する場合と比べて、子どもたちにより手厚くかわることができます。教師の多様な目(トンボの目)で子どもを複眼的に観察することが、より確かな子ども理解

につながります。子どものつまずきや願いに応えることができ、学力の向上を目指すことができます。

協力的な指導の効果をあげるためには、それぞれの教師の役割分担と連携・協力の仕方を明確にした指導計画(学習指導案)を作成する必要があります。これは複線化した指導であり、評価にも言えることです。

教師間の協力的な指導は、個に応じた指導を充実させる観点から、重要な指導方法であり指導体制です。

教師の同僚性を培う

次は、教師にとっての意味です。協力して共に子どもの指導に当たることによって、互いの指導のよさを学ぶことができます。特に若い教師はベテランの教師から多くを学ぶ場になります。教師間で協力的な指導を行うことは、学び合う関係や仲間意識など同僚性を培う重要な機会です。同僚性とは、教師間に学び合い支え合う人間関係が醸成された教師集団のことです。

教師には、それぞれ持ち味や得意分野があります。パソコンの得意な教師もいれば、地域の実情に詳しい教師も

います。逆に、ある分野に苦手意識をもっている教師もいます。教師がそれぞれのよさを発揮しながら授業や教育活動に当たることによって、教師の弱点をカバーし合い、学校としての力を総合的に発揮することができます。

このように、協力的な指導には授業の質を高めるだけでなく、学校運営に対して教師の参画意識を育てるという重要な意味があります。

地域の人との協力的指導

生活科や社会科、家庭科、特別活動、それに道徳や総合的な学習の時間などは、地域の様々な人たちの協力を得ながら、授業が展開されています。地域人材の活用です。これは地域の人との協力的な指導であり、「もうひとつのチームティーチング」です。

地域の人から話を聞いたり、活動を見せていただいたりすることには、地域の専門家から指導を受け、授業の質を高めることができるという利点があります。地域の人たちに対して理解を深めることもできます。また、地域の人から評価を受けることができます。子どもたちは教師とは違った視点から評価されることで、改めて学習成果を確認する機会になります。

このような地域の人たちとの協力的な指導は、授業づくりにとどまらず、地域と学校が一体になった学校づくりにつながるものです。地域に開かれた学校をつくるうえでも重要な意味をもっていると言えます。

教えて北先生

発言しない子ども

Q. 授業への参加意識を高めるために、子どもたちに発言することを促しています。しかし、どうしても発言しない子どもが数人います。こうした子どもたちも意欲的に発言するようにするには、どのようなことに配慮するとよいのでしょうか。

A. 発言しない子どもには、いくつかの原因があります。その一つは、発言しないのではなく発言できない場合です。教師の発問が高度で、何を答えたらよいのかわからないときや、自分の考えがもてないときには、発言しようにも発言できません。このような場合には、答えやすいように発問の内容を変える必要があります。

その二つは、自分の考えをもっていきながらもかわらず、発言しようとしにくい場合です。これにもなんらかの原因があります。発言することに意義を見い出していない、学習意欲が喪失している、周囲の人の反応を気にしている、自信がないなどが考えられます。こうした子どもには阻害している原因を取り除く指導が求められます。

発言することは授業に参加している姿です。自己向上心とともに、友だちの役に立っているという自己有用感を育て、みんなで共に学び合うことの意味と大切さを指導したいものです。



教育の動向

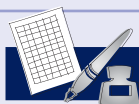
メンタルヘルス対策

文部科学省の調査によると、平成22年度において公立学校に勤める教員の精神疾患による休職者数は、5407人にのぼっているといえます。これはきわめて深刻な数字です。なぜならば、教員の精神疾患患者の増加は、子どもたちに重大な影響を及ぼすだけでなく、休職期間中の給与の支払いや代替教員の配置によって財政上の負担が増加するからです。もちろん当事者にとっても深刻な課題です。

文部科学省は昨年末に「教職員のメンタルヘルス対策検討会議」を立

ち上げ、現在検討が進められています。ここでは、教員の精神疾患の原因や背景などをタイプ別に考察し、予防的な取り組みやメンタルヘルス不調の早期発見と早期対応の方法などについて検討されています。また、休職後に職場に復職したときの教育委員会や学校の効果的な支援のあり方についても話し合われています。

「教育職員のメンタルヘルスの保持等について」は、文部科学省からの通知（平成23年12月22日付）の中に示されています。その写しが教育委員会を通じて学校に届いていると思いますので、一度目を通すとよいでしょう。



コラム 北先生の授業力向上術

ズレを生かす

ここでいう「ズレ」とは「対立」のことです。授業において次のようなさまざまな意味あいがあります。

まずは、子どもの間で見られる考えや考え方のズレです。対立軸や違いが明確になると、議論や討論が伯仲します。自分はどうか考えるかというときには、判断力が求められます。教師は子どもの間に生まれたズレを生かし、論点を整理することによって、活気のある話し合い活動を展開することができます。子どもの間のズレは、授業を盛り上げるまたとない「教材」です。

次に、子どもたちが既にもっている知識や見方などでは理解したり解釈したりできない教材（資料や事実）を提示します。これは子どもと教材との間のズレです。社会科を例にすると、

例えば雪は想像以上に重いという事実、せっかくできた果物の実を若いときに摘み取ってしまうという事実などは、多くの子どもにとって意外なことです。「意外性との出会い」の場をつくることによって、疑問が生まれます。

さらに、事実と事実の間のズレを生かす方法があります。例えば、市の人口がほとんど変化していない事実と、最近ゴミの処理量が減少している事実を提示します。二つの事実のズレから「人口は変わらないのに、どうしてゴミの処理量は減少しているのか」といった疑問が生まれます。

このように、「子どもVS子ども」「子どもVS事実」「事実VS事実」のそれぞれの間のズレを生かし、子どもたちにズレを意識させることによって、疑問や問題意識をもたせ、学習意欲を高めることができます。

INFORMATION

新刊 なぜ子どもに社会科を学ばせるのか

社会科という教科の成り立ちと意義を改めて問う!

◎著者 北 俊夫
◎定価 998円 (本体950円+税)
◎発行 株式会社文溪堂
A5判 104ページ



「教育の小径」の全てのバックナンバーをインターネットでお読みいただけます!

ダウンロードして印刷も可能です。お知り合いの先生にもぜひお勧めください。
<http://www.bunkei.co.jp/2012/monthly.html>
または「ぶんげい 教育の小径」で検索。

企画・編集：ぶんげい教育研究所
発行：株式会社文溪堂
発行日：2012年5月1日